

第四 最初の重大事故

常闇の國

工事のありさまは、いままで述べて來たことで諸君の頭に、おぼろげにでも入つてゐると思ふ。

大正七年の春、熱海口からの攻撃が開始されて以來、工事の進行はまづ順調に進んで居つた。

トンネルの中は常闇の國である。晝夜の別がない。また長いトンネルになると四季を通じて気温も大體一定してゐる。丹那トンネルでは、大てい攝氏十六、七度で

あつた。それは丁度外の世界でいへば春先の陽氣と思へばよい。

年中春先のやうな陽氣のところでは働いてゐるといへば、さも工合がよささうに思へるが、トンネルのなかは、そんな暢氣なところではない。

湿度は百パーセントで何時もじめ／＼してゐる。また太陽の光には全然めぐまれないから、體が少し弱い人には短い間でもつとまらぬ。

かういふところでトンネル工事は夜となく晝となく進められてゆく。どうせ太陽と少しも縁のない世界であるから、夜も晝も變りがない。だから普通は三交替、すなはち八時間ごとに交替するやうになつてゐる。少し仕事が難場で疲れの甚しいときは、四交替で六時間ごとに替はる。更に水のひどく出るやうなところでは六交替つまり四時間ごとに替はることもあつた。

世間一般では、トンネルの中に働いてゐる労働者を一樣に坑夫とよんでゐる。し

かしその坑夫の中にもいろいろの仕事によつて職名がわかれてゐるのである。

鑿岩機で孔をつくり、ダイナマイトをつめて山を爆發させる者、つまり發破をかける者を鑿岩夫といふ。

掘つた山がくづれないやうに板でかこつて突つかい棒をする、つまり支保工を組むのは、斧指と呼んでゐる。コンクリートで巻立てて仕上げをするのが疊築工である。これらがいはいゆる熟練工である。

このほかに崩した土をトロッコに積んで、それを坑外に運び出すのは礮出夫といつてゐる。これはあまり熟練を要しない。

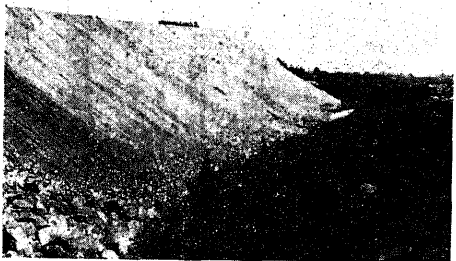
鑿岩夫や斧指を永年してゐた有能な者は、親方に號令といふものに取りたてられる。號令は、日々の作業を直接に監督するし、自分も大事な作業には従事する。かういふ人々によつて、トンネル工事は進められてゆく。

鑿岩夫によつてくづされた礮は、初めは人で、坑外に運び出される。外へ出された礮は、礮捨場へ捨てられる。

丹那トンネルのやうな長大なトンネルになると、この礮捨場は非常に大きなところを用意してゐなくてはならぬ。

これは後の話でよいのだが、ついでにこゝで話してゐかう。完成までに丹那トンネルから掘り出した全部の礮は六二七、二二二立米といふとどろくべき數量であつた。

この多量の礮を處分するにはどうしたか。三島口の方は丁度、谷があつて、そこへ捨てるとよかつた。熱海口の方は礮捨場として特別に田



第 25 圖 礮 捨 場

甫を七千坪ほど買収しなくてはならなかつた。

仕事は順調に進んだ。掘り出される礫はどん／＼運び出される。外からは支保工の材料や、トンネルを仕上げるコンクリートが多量に孔道の中へ運び込まれる。

坑の奥からは、日に何回か物凄いの発破の音が聞えて来る。ダイナマイトのほひがたゞよひ、壓縮空氣がその後へ送られて清められる。

かういふことが夜となく晝となくつゞけられて、三年の月日がたつた。

大正十年の春には、仕事はどのやうなところまで進んでゐたであらうか。

熱海口の方は、四〇〇米くらゐまで進んでゐた。三島口もこれより稍、少い程度に進んでゐた。

ところが工事に着手してから、滿三年の記念日に、熱海口にこれから話さうとする大事件が起きた。

大崩壊

大正十年四月一日。午後四時二十分頃熱海口の坑口から約三百米奥に入つたところが、突然大音響とともに約七十米崩壊した。

この時は底設導坑はすでに坑口から約一軒三百米近くまで掘り進んでをり、頂設導坑も約五百米くらゐ進んでゐた。

崩壊したところは、もはやトンネルの全形まで掘りひろげられてゐて、コンクリート巻にかゝつてゐたのである。

この崩壊によつて、坑道の奥と口との間が土砂のために中斷されてしまつた。奥で仕事をしてゐた者は中へ閉ぢこめられてしまひ、丁度崩壊したところにゐた者は

生き埋めになつた筈だ。

普段はトンネルの中には二百人くらゐの人々が働いてゐるのであるが、丁度この日は動力が故障してゐて、仕事が出来ぬので大部分の者が休んでゐた。

そのとき疊築工を使つてゐた親方の話がある。

『崩壊の場所より少し手前は大分地質も悪いので可成り心配して慎重に仕事をしました。そして無事に此處を切り抜けたのでほつと一安心して奥の仕事に移りました。そこは地質もよく、これなら普通に進行出来ると安心しました。當時使用した支保工はち役所から支給されたもので、實に立派なものでした。地質もよくなつたし、支保工は立派だし、これが落ちるとはどうしても考へられませんでした。』といつてゐる。

しかしそのあとにまたかう語つてゐる。『當日私は二時に坑奥に入らうとして、

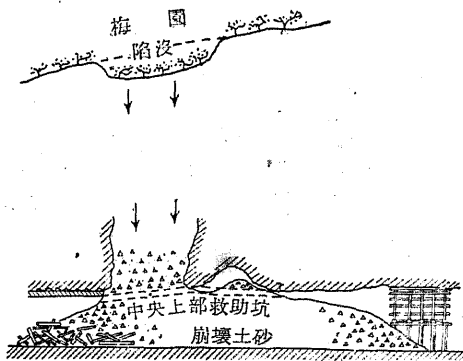
坑内のいつも電車の來るところで電車を待ちながら、見るともなしに、奥を見ると丁度一時間前にセントルの検査をして貰つた筈なのに、セントルの工合が變だ。これでどうしてち役人の検査がすんだのだらう。といふのはセントルが皆一二寸喰ひちがつてゐる。セントルといふのはコンクリートで巻立てをするための足場のことをいふのですが、跳出しから砂がバラ／＼落ちてゐる。けれど私の頭には、こんな立派な支保工が組んであるのだから、つぶれる氣遣ひはないと信じてゐたのです。しかし砂のバラ／＼落ちるのはをかしい。普通なら何か異常があるにちがひないとすぐ氣がつくはずなのに魔がさしたのだとでもいふのでせうか、このときは大引が非常に押されてゐるといふことにちつとも氣がつかなかつたのです。』

『實際崩れたあとを見ると、支保工の足が全部きれいにさらはれて、ペシヤペシヤになつてゐました。』それは坑口の方が悪くて奥はよかつたが、坑口の方の悪

『どころに誘はれて奥のよいところがさきに落ちたからでせうか。』

以上の話で大體そのときの状態を知ることが出来る。

崩壊から一ヶ月ものちに熱海地方に大雨があつたとき、崩壊したところの眞上にあたる梅園はなぞの或るところが一坪半くらゐ凹んだ。その眞下のところが圖のやうに崩壊して慘事を起したところである。



第 26 圖 陥 没 の 所

坑内にゐた人々の運命はどうなつただら

う。
外そとにゐた者達はどうしたか。物凄い崩壊の音がすんで、こわく／＼中の様子を見よ

うと近づいてゆくと、また物凄い音がして、そのたびに風が起り、もつてゐるカンテラの灯が消えてしまふのであつた。

やがて坑内からの物音も絶えた。夕闇があたりを包み、熱海の海に浮いてゐる初島、大島が見えなくなつて行つた。

恐ろしい興奮の去つた後に死のやうな恐怖きょうふと静けさが來た。そしてその後には人のいらだたしい心持が一度に爆發して行つた。

崩れたところの長さはどのくらゐであらう。

幾人が崩壊のところにあつて生き埋めになつただらう。その奥の方に閉ぢ込められてゐるのは幾人だらう。

とも角一刻も早く救助をしなくてはならぬ。また奥との連絡れんらくを早く取らなくてはならぬ。

鑿岩機さくがんきを動かす壓縮空氣を送るための鐵管のことは前に話してゐた。

このパイプの大きさは直徑十糎位ある。それに口をあてて呼んで見たが返事がない。ガンガンたいて見たが更に返事がない。して見ると奥の者が全部死んでしまつたか、パイプの中途に故障が出来たか、どちらにしても唯一の信號の方法が絶望になつた。

その間にも救助作業の方法についての相談は進められてゐた。救助坑きうじょくわうはどこを掘り進めたらよいか。或る者は、崩れた土砂は山型になつてゐる筈だから、一番上の頂設導坑のところに掘り進むがよいといひ、或る者は上はまだ崩れ落ちるから危険だと主張した。結局底設導坑と左右と三つを掘り進めることになつた。

翌朝になると、三島口の方に働いてゐる人達が應援に來た。さうして更に頂設導坑からも掘り進めることになつた。

坑内に閉ぢこめられた人々が、一刻千秋の思ひで救ひを待つてゐるのはいふまでもない。しかし外から救ひの手をのばさうといふ人々のいらだちもまたそれにあ

らぬものである。

友が坑内に閉ぢこめられてゐる。或は土砂の下敷きになつて命たえたかもしれぬ。或は倒れた支保工の間の僅かのすきまに身を入れて救ひを待つてゐるかも知れない。

トンネル工事は、夜も晝も交替でつづけられるものであるが、この救助作

業には晝夜の別はもちろんないが、交替して休むこともない。眞に不眠不休といふ



第 27 圖 救 助 作 業

のはかういふことである。

一方坑外の光景はどうであつたらうか。鐵道病院の大旗の下に大テントが張られ、
醫者や看護婦が大勢つめかけてゐる。地元の人々が消防隊や在郷軍人の旗を押し立
てて應援に來る。戦場のやうなありさまであつた。

これらの應援隊の好意は感謝しなくてはならぬが、私には、もつと他に語らねば
ならぬことがある。

坑夫 氣質

世間の人は、坑夫といへば、荒くれの酒をのんで喧嘩をするものと思つてゐる。

しかし、それは誤解である。坑夫は、暗い地中で、ダイナマイトを爆發させ、岩石

を崩し、大聲を出して、どなり、荒々しい言葉を出す。

烈しい仕事を終へて、一日の終りには酒ものむし、なかには喧嘩をするのもある。

しかし、彼等の眞の心持は、優しく、正直で、情にもろく、信義に篤い。恩を感じ、
義理に動く。

坑夫でない人も酒をのむではないか。喧嘩をするではないか。

坑夫の態度が少しく荒々しく見えても、それだから彼等が單なる亂暴者と思つて
はならぬ。

事實かうした事故の起つたとき、坑夫たちが出す、人間としての底力こそは、ま
ことに尊いものである。

徳川時代には坑夫は野武士に取り立てられた。坑夫が一人前になるには、ちやんと永年の修業をして、『坑夫五十三ヶ條』といふ巻物の免狀を貰つたのである。

るに忍びない。全部の遺骸を發掘し終へたのは實に二ヶ月後の六月上旬であつた。坑内深く閉ぢこめられた十七人の人々には、幸によい指導者飯田清太氏が居つた。次にその飯田氏の遭難談のなかから拾ひ出して、坑内の様子と遭難者の有様を描いて見た。

『……丁度四時半頃でした、恐ろしいザーザーといふ地ひびきが始り、その煽りでカンテラの灯りも消えてしまひました。そちらを見ると土砂がくづれて埋まり、坑外の明りがほんのわづかだけ三日月型に見えてゐます。しかしそのわづかの明りもだん／＼薄れてしまひ、つひに全く眞暗になつてしまひました。

崩壊のところゐたものは、皆つぶれてしまつた。しかしそれより中にゐた者は残つてゐます。それを集めて見ると私ともで十七人になりました。

山鳴りのある間は動けないので、じつとしてゐまして、その間に萬一のことを考へて皆の戸籍を調べ、私のもつてゐた手帳に記入した。ともかく、落つて救助に來るまで待つより他に仕方がないから騒ぐ人々に心を落つけるやうにいひつけました。

そのうちに、眞先に私達の心配になつたのは、坑内の水のことでありました。坑内には相當の水が湧いてゐて、それは下水のやうにして坑外へ流れ出してゐるのですが、いまその出口が土砂で、すつかり埋まつてしまつたのですから、中の坑内にそれがだん／＼にたまつて來れば、僅かのこつてゐる空間が水で一杯になつてしまふ。これは非常にこはい。外に流れ出る水は、一時間に二千石ぐらゐの量であつたから、見てゐると氣のせむかたちまち水位が上つて來るやうに見えます。水責めにあひはしないかといふ氣持は皆を非常な不安にあつたといへました。しかし落つて奥の空間を勘定して見ると、大體に於て六日頃までは支へ得るだらう。その間には救助さ

れるだらうから、水責めで死ぬことはないだらうと、やゝ心を安んじたのであります。』

『先づ崩れたときに、皆のカンテラを集めて、そのカンテラのカーバイトを大事にしまつた。普段のときは小さい灯をつけておくだけにして、灯の無駄のないやうにしなくてはならない。それからマッチも大切にしないでなくてはならぬので、みな集めました。かういふやうにして救はれるまで眞暗にならぬやうにしたいと思つたのですが、遭難したのがすでに交替に近いときでしたから、カーバイトののこりは少くなつておました。カーバイトは四日までではあつたが、それから先は眞暗になつた。それでよく世間で淋しいことを灯が消えたやうだといひますが、いつ救けられるかもわからぬ、坑内で、ガラ／＼山の崩れる音をさきながら、足の下の水にうつつてゆらゆらとしてゐた灯が、いよ／＼消えて行つた時の淋しさは、たうてい言葉で現

すことは出来ません。お互に螢のやうな灯でも顔が見えるうちは元氣づけておました。が、灯がなくなつてしまふと顔の見えないところで話すのですから、その淋しさはいよ／＼深くなるばかりでした。』

『どうかして外の者と連絡をとり度いと思ひました。御承知のやうに鑿岩機の動力として壓縮空氣を送つてゐる鐵管があります。それは十糎位のもので、坑外からずつと引つぱつてあります。それで、この鐵管を通して、外と連絡をとらうと思ひましてそれに口をつけてゐーいゐーと呼んだり、がん／＼たゝいたりしましたが、一向に反應がありません。これは、途中のあるところをゴムのホースでつないであつたので、運悪くもそこが崩れた土砂に押へられてしまつたのでした。實はさういふことは後でわかつたことですから、連絡を取らうと思ふ一心で、通じないのをなか／＼あきらめずに、いつまでもどなつたり、たゝいたりしてゐました。あと

できくと、坑外の人達も矢張り、この鐵管をたしいたり、どなつたりしてゐたといふことです。若し、この鐵管が無事に通じてゐましたならば、まづ連絡が取れるので、どの地^ち點^{てん}をほつて來れば一番早いか。三日月形に外が見えたのは、土砂が山の形に崩れて積んでゐるのだから、一番上をほつて來れば、早いわけです。それをあしへることが出來たら、二日位早く救ひ出されたと思はれます。何米ぐらゐの間が崩れてゐるとか、外と内とで話すことが出來ますから大變便利であります。また、鐵管から新しい空氣を送つて貰へば、中にゐる者がガスで苦しまずにすみませす。それから鐵管の中へ卵を入れて、それを送つてよこして貰へば、内のものが物をたべられるから元氣でゐられます。こんな具合に、鐵管が通じてさへゐたら、非常に幸でしたが、まことに残念でありました。』

『坑内へは食ひ物をもつて行きませんから、たちまち空腹になるわけであります。

しかし、山が崩れたばかりには、興奮してゐますから空腹も感じませんでした。だん／＼落ちつくと空腹を感じ出しました。幸にも坑内に湧いてゐる水は、前に試験をして見て、それは飲んでも差支へないことがわかつてゐましたので、その水をおのゝめてゐました。若し水ものめなかつたなら、私たちの弱り方はもつとひどかつたと思ひます。』

『坑内は外から全然空氣が來ませんので、だん／＼炭^{たん}酸^{さん}瓦^が斯^すが強くなつて、マツチをすつても灯がなか／＼つかないやうになりました。咽^{のど}喉^ごがだん／＼いがらつぽくなつて來ます。それで、水の湧いてゐるところは、他のところにくらべて、いくらか空氣がきれいのやうに思はれますので、十七人がそこへ集つて柵^{たな}を作り、ねてゐました。』

『四日目までは辛じて、灯があつたがこれもとう／＼消えてしまつたことを前に

申上げました。さうすると六日目の午後二時から五時頃迄の間に、その眞暗ななかで悲觀してゐる私達の耳へ恐ろしい音がきこえて來ます。それは、また山が崩れてゐるのです。その崩れて來る音といふのは、山を圍つてある板へ石がぶつかり、何ともいへぬ凄じい音を立てます。その次にはその石が水の中へ落込んで來る。さうすると水がまた我々の顔へ飛びかゝるといふわけです。かういふ状態が三時間もつづきましたので、元氣をつけるために、ほら、をふいてゐた連中も黙つて、だん／＼しよげてしまひました。

烈しい音がやむと、今度は眞暗の中に、水がしたゝる音だけがきこえて來ます。

その淋しい音をききながら、今日でもう六日たつたと、考へるのでした。』

『幾日くらゐで救けられるかといふことは、誰も彼も一番氣にしてゐます。それで、私は大體六日くらゐで助けられるだらうと目算を立て、皆にもさういつてゐま

した。しかし今日で六日たつたのに、まだ外からは、音もきこえて來ません。さうすると、もうかうなつてはたうてい駄目だ、とても助かりつこはない。こんな苦勞をするくらゐなら死んだ方がよい、一ぺんにつぶされて死んだ奴の方が羨しい、などといひ出す者があります。自分は餘程罪がふかい者だなどといひ出す者があります。そのうちに一人がいつそ死んでしまはうぢやないかといひ出すと、たちまち賛成者が幾人も出て來ました。そこで私はどうしたらよいかと思ひましたが、何だ貴様たち、意氣地のない奴共だ、死ぬの生きるのと前たち靜かに考へて見ろ、いままで我々がかうして生を得てゐるといふのは、何がためだ。山が來てつぶれるのであつたにもかゝはらず、かうして生きてゐるのは、我々はもつともつと社會で働かなければならぬといふ使命をもつてゐるからだ。それを自分から死なうなどといふやうな不心得は何事だ。まづ靜まれ、かういふ時には自分の力でいくら焦つても出

られやせぬぢやないか。外から救つてくれるのを待つより他には仕方がないぢやないか。何でもよい、お前達の信仰してゐる不動様ふどうさまでも阿彌陀如来あみだにょらいでも、神様でも信じてゐなければいかん。と説教をしました。さうすると、一人がはじめ、次々に自分の過去にやつたことをごんげしはじめました。そのごんげには小さなケチなこともありましたが、それが一通りすんだらみんな安心して、ぐう／＼いびきをかいてねてしまひました。』

『八日目の十時頃だつた。水に光がキラキラ映つて來た。私共は一ぺんに嬉しくなつて、あわてて萬歳をやりました。』

飯田清太氏の話はもつと詳しいのであるがこのくらゐにしておかう。

助けられた人々は、外の人々が想像したよりも非常に元氣であつたが、それでも八日間坑内で、最も悪い条件のなかゐるのであるから、慎重しんちょうな看護をされて、さ

うして一週間ののちにはみな完全に元氣になつた。

若しかういふときに、閉ぢこめられた坑内で、徒らにあせつたり、争つたりしたならばきつと幾人かの犠牲者を出したことと思ふ。飯田氏のやうなよい指導者しだうしゃがゐたことは、閉ぢこめられた人々には、大變仕合せであつた。

飯田氏は、遭難中に、坑内の状態、人々の状態等を日記につけてゐいた。それは當時の新聞に報道されたが、人々に非常な感銘かんめいを與へた。しかしそれを引用してゐると、永くなるから今は割愛することにする。

ともかく丹那トンネル最初の重大事故はかういふわけで一段落ついた。そして新しい進軍がつけられて行つた。